

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (76) エジプト王 シシャク

反逆の兆しを察知し、ソロモンはヤロブアムを殺そうとしますが、ヤロブアムはエジプトのシシャク王のもとに逃亡し、ソロモンが死ぬまで留まったと記されています。従ってシシャクはヤロブアムを庇護したエジプト王ですが、ソロモンの死後、王国が分裂した時、ユダ王国を襲い、略奪しました。おそらくヤロブアムを通して、侵略の手がかりを狙っていたのでしょう。



ブバステイスの浮彫 (カルナック)

シシャクはエジプトの記録から **Shoshenq I** (在位 c.943-922 BCE)だと見なされています。彼はリビア出身のエジプト王で、カナン地方への遠征記録がブバステイス(カルナック)の浮彫に残っています。

浮彫に残されている地名によれば、まずユダ王国のネゲブ地方から侵略しています。再びガザからエルサレムに進んで、レハブアムの築いた砦の町々を襲っています。

聖書には北イスラエルへの攻撃は記されていませんが、記録によれば、シシャクは北にも進みヤロブアムの支配するイスラエル王国の要所、要

所の町をすべて襲い、最後にメギドに石碑を建てて、ガザから、エジプトへ帰還したとのこと。統治の年代を見るとちょうどダビデ王国がユダとイスラエルに分裂した時まで活躍しているようです。レハブアムはエジプトからの攻撃を恐れ、町々を砦で堅固にしても耐えられませんでした。

レハブアム王の治世第五年に、エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上って来た。彼らが主に背いたからである。彼は戦車千二百両、騎兵六万を擁し、彼がエジプトから率いてきたリビア人、スキム人、クシュ人の民は数えきれないほどであった。彼はユダの砦の町を次々に陥れ、エルサレムにまで迫った。(歴下12:2-4)

レハブアムの治世になっても、彼はアンモン人であるソロモンの妻でレハブアムの母ナアマの信仰に従って、異教の神々のための高台を築いて、その慣習に従っていたのです。預言者シェマヤは主に背いたために、主に懲らしめられていると、この苦しみを受け止め、レハブアムに身を低くするよう勧めました。レハブアムはシェマヤの言うとおりに、シシャクに多大な財宝を貢ぎ、エジプトの属国になることで滅亡を免れました。エジプトの王女がソロモンの妻であったとすれば、このような略奪はなかったはずでしょう。

エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上って、主の神殿と王宮の宝物を奪い取った。彼はすべてを奪い、ソロモンが作った金の盾もすべて奪い取った。レハブアム王は、その代わりに青銅の盾を作り、王宮の入り口を守る近衛兵の長たちの手に託した。(列上 14:25-27)

イスラエル王国には略奪すべき金銀財宝はなかったのでしょうか。代わりに人を奪い、奴隷としてエジプトに連れて行ったのです。浮彫の人間の姿は奴隷とされた人々の姿と見なされています。ソロモンの栄華、古代エジプト、ローマ帝国、等々の繁栄を支えたのは、このように戦争によって、奪った人々を奴隷にしたことによるのです。過酷な労働をさせたことで成り立ったのでしょうか。軍事力を誇る者によって、人間の世界は蹂躪され、奪われ続けていると思えてなりません。現在も資本を独占する者によって、多くの労働者が搾取され続けているのと同じです。